

## 肝炎治療の地域連携パスの紹介

副院長 尹 聖 哲

### はじめに

我が国の肝細胞がんの90%がウイルス性肝炎に起因していますが、ウイルス性肝炎の早期発見から抗ウイルス療法の導入まで辿り着ける症例はごく一部しかないのが現状です。さらにC型肝炎のインターフェロン(IFN)療法においては副作用を伴う長期治療と長期フォローが必要となるため、精神的・身体的ストレスに加え入院や通院にかかる時間と医療費の負担が大きく、患者に対する十分なケアが必要となります。2007年以来、拠点病院を中心とする肝疾患診療ネットワークの構築、医療費助成など肝炎治療を取り巻く環境整備が進んできましたが、効率の良い肝炎治療を推進するためにはかかりつけ医と専門病院の連携が必須とされています。このような現状を踏まえて、東播磨圏域では医師会と当センターが中心となって2008年5月から東播地区肝炎病診連携の会を立ち上げ、C型肝炎IFN療法の病診連携パスを作成しました。2009年7月から運用を開始し早や2年を経過しております。

### 連携パスの内容と特色

患者が安心して質の高い医療を受けられるためには、まず地域の医療レベルの向上と標準化を図る必要があります。肝炎診療にかかわる定期的な勉強会を開催しています。長期にわたる治療や経過観察など適切な管理を可能とするためかかりつけ医と専門病院が役割分担を行う循環型連携パスとし、非専門領域の先生方でも使用できるユニバーサルかつ分かりやすいパスになっています。

その特色は、①かかりつけの先生方からスムーズにご紹介いただくための簡便な専用紹介状と治療導入後にかかりつけ医で継続治療していただくためのわかりやすい専用治療依頼状を使用しています。②役割分担を明確化するための詳しい運用要綱があります。ここには最新のガイドラインを載せています。③見落としや検査の重複・脱落を避けるため医療者用連携パスシートがありチェック項目と役割分担が一目でわかるようになっています。④患者側が安心・信頼して医療を継続していただくための患者用連携パスシートもあり、治療終了までの診療内容と注意点が分かりやすく記載されています。⑤さらに患者、かかりつけ医、専門病院3者の情報共有のために患者手帳を作成しました。この患者手帳は携帯性を重視してポケット版にしています。投薬量、検査値、IFNの副作用の程度(過去5年間のIFN副作用を集計し頻度の多いものを列挙)を自己記入してもらっており、「便利である、わかりやすい」など患者側からもかかりつけ医の先生方からも好評をいただいています。

### 連携パスの効果

当センターにおいて2004年1月より2010年12月までの7年間にIFNを導入した症例は340例ですが、当センターと医療連携した症例数は68例で、連携した医療機関は9病院、31診療所でした。パス運用開始後1年半でパスを適用した症例数は49例とまだまだ少ないですが、適用例は全体の5割弱を占め他の地域と比較してかなり高率です。パスの効果としては、IFN導入例が増加しましたが、治療中止率は低下し完全著効率は向上しました。患者の利便性が確保され、複数の医療機関で副作用をチェックする細やかな患者ケアが可能となったためと思われる。

### 地域の先生方へ

地域の先生方には連携パスのメリットをご理解いただき、ますますご利用、ご協力賜りますようお願い申し上げます。C型肝炎IFN療法の連携パスの詳細と専用紹介状につきましては、当センターホームページに掲載しておりダウンロードも可能ですのでご参照ください。